



Title	キャロル・ギリガンとケアの倫理 第1部『抵抗への参加』を読む パートII
Author(s)	小門, 穂
Citation	臨床哲学ニュースレター. 2025, 7, p. 62-64
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100161">https://doi.org/10.18910/100161</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

**特集2 第12回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）**  
**テーマ：キャロル・ギリガンとケアの倫理**

**キャロル・ギリガンとケアの倫理  
第1部『抵抗への参加』を読む パートⅡ**

小門 穂

ご紹介ありがとうございます。大阪大学大学院人文学研究科の小門穂と申します。専門分野は臨床哲学のお隣の科学技術社会論です。本日はコメントの機会をいただきありがとうございます。

パートⅡ学生編でご報告してくださった3人とも、ご自分の研究や関心に引きつけて丁寧に読んでいて、大変面白かったと思います。私自身はケアの倫理の素人で、それのご報告の見どころや、とくに面白いところに言及し、またご質問をさせていただければと思います。

まず、吉田裕香さんの「来たるべき春のために：『抵抗への参加』にみる「わたしたち」の連帯可能性」に対するコメントです。

装丁について言及された、ケアの倫理が眠っている冬の象徴である雪の結晶と、ケアの倫理の目覚めを象徴する花開くポピーの美しさは目を引かれるところだと思いました。ところで、冒頭の小西さんの趣旨説明で取り上げられていた原書の表紙ではストップをかけるように見える人間の手が目立っていて、日本語版の表紙も原書の表紙もどちらも素敵なのですが、抵抗を表すその仕方の違いを感じました。

さて、吉田さんは、イマジナリーフレンドと呼ばれる他者の存在と一緒に生きる、青年期・成人期の人々の生き方を研究していらっしゃいます。子どもとは異なり、大人は病理的な状態と結び付けられやすいという困難さがあるため語りにくい、そういういたイマジナリーフレンドとの関わりをいかに人格との関わりとして捉えるのかということをテーマに研究をされている吉田さんから読むギリガンについての言及はとても興味深いと思いました。吉田さんは、ルークというイマジナリーフレンドとの関係を綴る手記に引きつけてギリガンを読み解き、イマジナリーフレンドは、ケアの倫理における人間に含まれないのではないか、と指摘します。「いないとされる存在」の声をどう聞くのか。その存在に語りかけること自体が、応答であり、抵抗になりうるという吉田さんの指摘はとても重要なものだと思いました。

私は、生殖補助医療の制度についての研究をしています。生殖補助医療の重要な当事者には、生殖補助医療によって生まれてくる人たちがいます。しかし、重要な当事者でありながら、どのような生殖補助医療を使うのか、ということを決める場にはまだ存在していないため、参加できません。生殖補助医療の制度構築にあたって生まれてくる人たちの声をどう聞くか、ということを考えるときにも非常に参考になると思いました。

2つ質問させていただきます。ご報告の中で、久保の手記からの引用がありました。イマジナリーフрендのルークが「都合の良い人形だと認識されて甘ったれられるのはいい気分じゃない」と言ったことに対して、久保が「私の中に確実にある保持者としての優越感を見抜かれたようで耳が痛い」と述べるところです。ここでの「保持者」という表現はどう読めばいいのか、伺いたいと思います。この引用の後には「IF保持者」という表現も登場します。保持者とIFの関係は、他者同士のフラットな関係なのでしょうか。あるいは、保持者にはもう少しパートナリストイックな含意があるのでしょうか。

もう一つの質問は、今後のご研究との接続についてです。ご報告の最後に、「わたしたち」の範囲を広げる可能性を探ることの重要性について言及されましたが、それはどのように可能なのでしょうか。

続いて、石川勇人さんの「抵抗への参加：沖縄戦の聞き書きの現場からの応答」へのコメントに移ります。石川さんは、沖縄戦体験者を対象とする「聞き書き」、聞き取りを行い、語りを考察する研究手法を用いて研究をされています。

石川さんのご報告は、沖縄戦体験者の声を本当に聞き取っていたのか、という疑問から始まり、ギリガンのゼミの経験に触れながら、ご自分の研究実践について展開されていきます。

ギリガンのゼミで博士課程の学生が聞き取りゼミでインタビューを行った際に、インタビューを通じて自分の思い込みのせいで見えなかった事実があることに気づくということから、石川さんは自分の研究へと話をつなげます。ここが非常に興味深いと思いました。石川さんは、当初は、沖縄戦体験者の沖縄戦中の話を聞いていたのですが、ある対象者の指摘により戦争中と戦後は切り離すことができないということに気づき、沖縄戦と戦後史のつながりを描くことを意識するようになります。

また、続いて、ギリガンらの少女の観察する研究における少女たちが自分の正直な声を隠すという指摘から、語り手たちが聞き手をいかに見極めてなにを応答するのか決めているのではないか、ということを論じます。石川さんのご報告では、声を聞くということが、聞き手と語り手の共同作業で作り上げられるものということが鮮やかに示されていると思いました。

ご報告の終わりの方では、ギリガンの議論を踏まえたうえで、聞き手が聞き手となるプロセスについて言及されています。

そこで、石川さんには、よい聞き手とはどういうものなのか、よい聞き手にはどうしたらなれるのか、お考えを伺いたいと思います。

3人目は、三原悠祐さんによる「ギリガンのケアの倫理のふたつの読み方：『抵抗への参加』の検討から」です。

三原さんは、現在、法学部国際公共政策学科にいらっしゃいまして、来年度に臨床哲学へと進学されます。男性学がケアの倫理をどのように受容できるか、という関心から、『抵抗への参加』を読まれました。

三原さんは、ギリガンが繰り返し述べる「わたしたち」や「人間」に注目し、これ

は何を指すのかを問います。人間は生来的に共感と協力の能力があり、声を発し抵抗する能力があり、本当に相互に理解し信頼し尊重し愛し合う能力があるというギリガンの人間理解に言及し、これを人間のあるべき姿と捉える倫理規範となることで、この普遍的な人間に入らない存在がいるのではないか、声が聞かれないのではないか、と指摘されています。

三原さんは、男性学とケアの倫理の接合可能性を探りたいという観点から、男性のケアの能力について検討します。男性はケアの能力をなぜ失うのか、どうすればその能力を取り戻せるのかという問い合わせを男性学は引き継ぐべきだと指摘しつつ、男性とケアの関わりを例示します。ここについて、お聞きしたいと思います。ギリガンの挙げた例を引用して語られる男性とケアの関わりは、乳児に微笑みかける父親の写真、子どもの輪の中で座っている男性の写真というもので、これは子を「ケアする存在」としての男性であると言えるかと思います。続いて、三原さんが期待しているという、方法論としてのケアの倫理の可能性のところで言及されるのは「そのような関係性にしがみつかざるをえない、そのような関係性によってケアされると感じていていたりする男性」であり、これは「ケアされる存在」としての男性であると言えるでしょう。三原さんには、男性学とケアの倫理の接合を考えるときに、男性はケアする存在なのか、ケアされる存在なのか、どう位置づけるのかということについて、お考えを伺いたいと思います。

私からのコメントは以上です。ありがとうございました。

(こかど・みのり)